

現代中国における指導者層の森林認識

平野悠一郎

はじめに

本稿は、中華人民共和国期の中国（以下、現代中国と略記）において、国家建設を主導してきた中国共産党の指導者たちが、この地域の森林に対して、どのような認識を持って臨んできたかを歴史的に明らかにすることを目的とする。今日、多面的な機能をもって人間生活を支えてきた「森林」の消失とその影響は、あらゆる環境・開発問題に直結するものとして懸念されている。その状況にあって、現在、世界最大規模の人口を抱え、経済発展著しい中国という地域の舵取りを行ってきた政策行為者が、いかなる政治的文脈や自然生態的・社会的背景の下で、どのように森林を見つめてきたかは、極めて重要なテーマとなる。現代中国では、共産党指導者層の強いイニシアティブの下に国家建設が進められ、様々な社会関係が改変されてきた。この構図は、地域の人間―森林関係に対しても例外なく当てはまる。すなわち、指導者層の意向を強く反映する形で、中央政府における森林政策が立案され、それが地域の森林をめぐる社会構造、及び森林環境の改変を生み出してきた。

本稿では、以上の前提に基づいて、現代中国の指導者層の森林を「見る眼」に注目したい。その特徴を、森林が人間活動に対して提供する諸機能別に掘り下げることで明らかにする。その結果として、現代中国において、どのような人間―森林関係の改変・構築が、政策的に促されてきたのかに対する理解を深めていく。

I 本稿の分析視角と先行研究

筆者は、これまでに、現代中国の森林政策とそれが地域の人間―森林関係に与えた影響について、法令整備や権利関係の推移といった観点からの分析を試みてきた（平野、2004, 2005）。そこでは、土地改革、社会主義集団化、改革開放といった、指導者層の理念・意向を反映した全体的な政治路線の変動と、それに基づく森林政策実施が、基層社会の森林をめぐる関係構造を大きく改変し、地域の森林に対する人間の働きかけを特徴づけていた。

では、それらの「上からの関係変化」の実行主体は、そもそもどのような森林に対する認識に基づいて、それらの関係変化を促していったのか。人間は、森林という自然要素に

対して、様々な立場から、多様な価値づけを行ってきた。それらの価値づけに基づく森林認識が、ある地域の政策行為者においてはどのように形成され、またそれがどのように実際の政策に反映されるのか。これが、本稿執筆の主な動機となった問題意識である。特有の自然生態的・社会的背景を有する社会主義体制下の現代中国においては、共産党指導者層の強いイニシアティブの下に国家建設が進められ、今もってその政治体制は一党支配の形式を保っている。そこで本稿では、まずこの指導者層の認識に焦点を当て、彼らと森林との間に、どのような関係が成り立つのかを探っていく。

以上の分析視角によるアプローチを進めるにあたって、参照すべき事例研究、理論的枠組みは、人文・社会・自然科学を問わず数多く存在する。本稿は、これらを適時参照していくが、とりわけ、以下の2つの先行研究の議論を検証するという点を重視している。

ひとつは、毛沢東を中心とした体制下における自然破壊を描いたシャピーロの議論である。シャピーロは、1950年代後半の社会主義建設の急進化に伴う盲目的なダム建設、森林破壊、四害駆除等、地域の生態系に深刻なダメージを与えた人間活動の根本的な原因を、人間・物質中心主義的な革命闘争の中で磨かれた毛沢東のイデオロギーに求める。例えば、毛沢東の提起した「自然に対する戦勝」や「愚公山を移す」といったスローガンは、人間の力への過信と自然の軽視を示すものであり、中国の伝統的な統治文化における自然との調和を意識した側面を無視し、自然破壊の側面をクローズアップするものだったとする(Shapiro, 2001)。これを、森林認識の方面から検証するのが、第1のポイントとなる。

2点目の検証課題は、早くからモラル・エコノミー等の概念を通じて、自然資源管理における立場の違いに注目してきたスコットの提示する、シンプリフィケーション(State Simplification)という理論的枠組みである(Scott, 1998)。これは、近代的な技術革新、官僚制度、思考法などが整う条件下において、政治的指導者や科学者・専門家によって構成される「政府」が、元来、「基層社会」において多様であった自然資源の利用・管理形態を、科学的管理の名の下に画一化・単純化(Simplify)していくプロセスを指す。この顕著な例として、近現代の社会主義国家、例えば旧ソ連等で行われた中央政府の計画管理に基づく天然林の一斉伐採と、用材などの商品生産に適した単一林の造成などが想定される。ネルソンは、社会主義体制下の旧東ドイツにおいて、中央の共産党政権による森林政策が、効率的な用材生産を主眼に据え、域内の森林を単一の人工林へと作り変えていくプロセスを明らかにしている(Nelson, 2006)。これらの研究において、指導者・専門家を含めた社会主義体制下の政府は、主に森林の物質・商品提供という機能によってもたらされる価値・便益を認識し、それに基づいて、域内の森林環境の上からの画一化を政策的に進める主体と捉えられる。この発想と枠組みが、同じく社会主義体制下にあった現代中国の指導者層の森林認識に当てはまるかどうか、もうひとつの注目すべき論点となる。

また、現代中国の政治過程においては、共産党指導者層の間に意見・立場の相違が存在し、それらがしばしば政治路線対立となって現われてきた。特に1950～70年代は、毛沢東のイニシアティブに最終的に帰結する場合が多かったものの、彼を中心とした社会主義

急進派と、劉少奇、鄧小平を中心とした現実重視の実務派に、周恩来や国務院の実務官僚層が絡んで繰り広げた路線対立が、社会主義集団化から大躍進、調整政策、文化大革命と続く「振り子」とも称される政治変動の背景となった。これに対して、1980年代以降は、改革開放の政治路線の下、鄧小平、江沢民、胡錦濤と続く最高指導者の下、集団指導体制が取られているが、依然としてその内部には改革・保守、あるいは地方閥・専門閥といった立場の違いが存在する。これらの指導者間の立場の違いが、森林・環境と向き合った際にどのように反映されるのかも、本稿における重要なテーマのひとつである。

以上の点を踏まえて、本稿では、現代中国の指導者層の森林認識を、公刊された個人文書、及び森林・林業方面での言行録等から探っていく。同時に、指導者たちの認識と実際の政策との結びつきを判断し得る同時代文献を併せて参照することで、資料的なバイアスの是正に留意する。結論を先取りすれば、この分析を通じて本稿は、上記の先行研究において抜け落ちていた、指導者層によって認識される「正当性の確保」という価値・便益が、現代中国における森林環境の政策的改変の根底に存在した、という側面を明らかにする。

本稿で扱う現代中国の「指導者」とは、歴代の国家主席、総書記、全人代常務委員会委員長、国務院（政務院）総理クラスや理念的な指導者（毛沢東、朱徳、劉少奇、周恩来、鄧小平、江沢民、胡錦濤ら）、及び、党の中枢部において農村工作、農業、林業、環境、防災といった森林と関わる政務を担当していた人物（例えば鄧子恢、董必武、譚震林、万里、温家宝ら）に限定する。ただし、彼らの森林認識形成において大きな影響があり、また実際の政策との関連が密である場合、国務院林業行政部門の責任者・業務担当者（官僚・技術者層）などの認識も併せて取り上げていく。

II 現代中国の指導者層に共通した森林認識

1. 「森林・樹木を増やせ」（緑化祖国、大地の園林化）

今日、現代史において各地に成立した社会主義体制には、マルクス主義のイデオロギーに基づいて人間が自然を支配するという観点に立ち、自然界の法則を無視した環境改変を行い、効率の悪い設備による生産を通じて自然資源を大量に浪費し、あるいは汚職の蔓延によって適切な環境規制を行わない、といったイメージが付与されている。これらは、もちろん共産党主導の政権下に国家建設が進められた現代中国においても当てはまる部分が多い。しかし、中国共産党の機関紙である『人民日報』の記事や、中央政府から出された森林政策法規は、1949年から「大衆を動員して荒漠地に植樹造林し、現有の森林を保護し、大規模な国土の緑化を推し進めなければならない」とする記事やスローガンで埋め尽くされており、一見してこれらのイメージが単純には当てはまらないことが理解できる。

この森林造成・保護によって「域内の森林・樹木を増やしていかなければならない」という目的意識が、時期を通じて、現代中国の指導者層の森林認識の根幹にあった。中華人民共
現代中国における指導者層の森林認識

和国建国直後の1950年4月、政務院総理の周恩来は「林業は100年単位の業務であり、我々は少しずつ森林を増加させていかなければならない¹⁾」と述べている。

1950年代後半、過渡期の総路線から大躍進へと至る急進的な社会主義建設を目指した政策は、鉄鋼・農業方面における常軌を逸した生産目標の設定と、基層・地方における行政管理システムの混乱、及び目標達成の虚偽報告が結びつき、食糧・労働力の過剰供出による農村の疲弊と餓死者の増大や、大々的なダム建設や森林伐採に伴う深刻な自然環境の破壊に帰結した。すなわち、シャピーロが、この時期に政策的イニシアティブを取っていた毛沢東のイデオロギーと結びつけて、その自然破壊性を批判したところでもある。しかし、森林方面に目を向けると、この1950年代後半においても、毛沢東をはじめとした中央の指導者層は、引き続き積極的な森林造成・保護を行うべきだという認識を持っていた。例えば、成都会議において毛沢東が生産力の「大躍進」を提起した1ヶ月後の1958年4月7日、中共中央・国務院は「全国規模の大きな造林についての指示」(日本国際問題研究所、1975: 31-36)を出し、大衆動員による大規模な森林造成、その質や効率の向上、そのための思想教育、事後の管理・保護の徹底などを求めている。

加えて、この1950年代後半の時期において、以後、今日に至るまでの森林政策の理念的な目標となった「緑化祖国」、「大地の園林化」という概念が、中央の共産党指導者層の認識として登場する。

「大地の園林化は、緑化祖国の遠大な目標である。大地の園林化とは、祖国の全ての土地において、全面的な計画に従って、その土地に適した各種の樹木を植え、植樹造林を通じて、次第に荒山、荒地、沙漠を消滅させ、それによる自然災害の回避、気候の調節、環境の美化を達成し、生産と人民の生活に有益な環境を創設することである」(「向大地園林化前進」『人民日報』、1959年3月27日)。

この2つの概念は、まさに当時、急進的な社会主義建設を主導していた毛沢東によって提起されたことになっている(当代中国叢書編集委員会、1985: 53)。毛は、それ以前にも、「1956年から1967年までの全国農業発展要綱(草案)」に関する議論を行う中で、「基本的に荒地荒山を消滅させ、…一切の可能な地に均しく計画に即して樹木を植え、緑化を実行²⁾すべきことを求めており、全国規模の森林造成・保護活動を展開する必要を示していた。

1980年代に入ると、各方面における改革開放を進める中で、鄧小平は、すべての満11歳以上の公民に年間3~5本の義務植樹を行わせるという「全民義務植樹運動」の実施を提起し、まさにこの「緑化祖国」、「大地の園林化」を住民に義務づけようとした。近年でも、西部大開発を進めるにあたって、江沢民が大々的な植樹造林、荒漠地の緑化による「山川秀美な西北地区の創造³⁾」を求める等、指導者層の「森林・樹木を増やせ」という呼びかけは続いてきたのである。

この目的意識に関する限り、指導者層における時期・立場等による差異はほとんど見ら

れない。毛沢東や鄧小平のみならず、軍事的指導者である朱徳や彭徳懐に至るまで、「森林・樹木を増やす」という点では全て共通の見解を有していた。

今日、中国の各地へ赴くと、村落・水路の周囲や、見通しの良い道路周辺の山の斜面に、人為的に植えられた樹木を見ることができる。特に、北方等では、1950～60年代に植えられた樹木が、あるものは成長し、あるものはほとんど枯れた状態で散在している。こうした景観形成の背後には、上記の指導者層の認識と呼びかけが存在してきたのである。

2. 共通の森林認識の形成背景

各時期の指導者層にこの森林認識を共有させた最も直接的な要因は、現代中国を通じて存在した「森林の過少状況」という、地域の自然生態的背景にある。2004年時点で、中国全土の森林被覆率（国土面積に占める森林の割合）は18.21%と集計されている。これは、同時期の森林被覆率の世界平均約27%、あるいは日本の67%と比べると、相当に低い数値となっている。しかも、域内に抱える世界最多の人口で割ると、1人当たりの森林面積は世界平均の5分の1程度となる。1949年の建国時点では、この状況が、さらに深刻なものとして指導者層に認識されていた。不確実な部分は否めないものの、当時の資料は、全土の森林被覆率を約5～10%程度と見積もっている（馬驥、1952）。

現代中国の開始時点での深刻な森林過少は、それ以前の歴史における人為的な開発に原因が求められる。紀元前2000年前後、現在の中華人民共和国に属する領域の多くは森林に覆われていたが、その後の戦乱、土木工事、人口の増加と農地転換などを通じて、各地で多くの森林が破壊され現代に至ってきた（上田、1999; Elvin, 2004）。

このような森林の過少状況下において、指導者層の選択は明らかに限られていた。すなわち、現代中国の政策行為者にとっては、将来の国家建設に必要な木材等の物質資源を確保する意味でも、また、水源涵養、土壌侵食防止、防風固沙によって自然災害を防止する意味でも、森林減少を食い止め、森林造成・保護の推進によって森林の諸機能の維持・向上を図ることが必然的に求められたのである。それは、例えば「右か左か」、「現実重視か継続革命か」、「改革か保守か」といった、指導者間における立場の違いや、それに基づく各時期の政治路線の方向性によって左右されるものではなく、「否応なしにその現状を認識し、対策を取らざるを得ない」という性質のものであった。事実、以下の節でも検討するが、建国初期から現在に至るまで、指導者層の間には、この慢性的な森林の過少状況に対する明確な危機意識が一貫して存在した。大躍進期のみならず、文化大革命の政治的混乱期においてさえ、「緑化祖国」の実現が呼びかけられているのは、この事実を示す象徴的な例である（『山東開展大規模植樹造林活動』『人民日報』、1967年3月30日）。

そればかりか、文化大革命以降の各時期の指導者たちは、自身が主導・支持する政治路線による森林造成・保護への貢献を、それ以前の政治路線への批判材料とし、自らの正当性を示すために用いてきた。例えば、文化大革命の初期においては、修正主義と非難されて失脚した劉少奇らの現実路線が、森林破壊を招き緑化活動を停滞させた元凶であると非

難され、毛沢東思想に基づく政治路線こそが、全土の緑化を推進し、森林の諸機能を発揮させることが出来るという言説が確立されている（「各地大規模植樹造林緑化祖国」『人民日報』、1968年4月22日）。次に、林彪・周恩来を批判するため、4人組が扇動したとされる1973年の批林批孔運動の際には、林彪グループによって森林が破壊されたと喧伝された（「河北陝西京郊大力植樹造林」『人民日報』、1974年4月4日）。その4人組が毛沢東の死後に逮捕された後には、4人組の活動が森林造成・保護への取り組みを破壊したとされるようになる（「青山常在 永続作業」『人民日報』、1977年6月4日）。そして、改革開放期に入ると、大躍進期や文化大革命期の政治路線そのものが、森林造成・保護を無視する悪しき風潮を形成したという言説が唱えられることになる。

以上の展開からは、「森林・樹木を増やせ」という前提の下、実際の森林造成・保護への政策的取り組みが、各時期の指導者・政治路線による「正当性の確保」に結びついているという構図が浮かび上がる。現代史における各地の社会主義政権の指導者たちは、「労働者階級の代表である共産党が、国家運営における絶対的な指導性を有する」という一元的な統治体制を維持する以上、常に自らの存在意義を示す必要に迫られてきた。すなわち、現代中国においては、この政治的背景と、歴史的に形成された森林の過少状況という自然生態的背景が、上記の構図を生み出したと考えられる。

もちろん、森林の過少状況が招く事態に対して、各時期の指導者層が「単独」で危機意識を形成し、実際の森林政策に反映させてきた訳ではない。特に、建国当初から1950年代にかけては、森林管理の専門的知識を有する人々が、中央の林業行政機関（当初、林墾部。1951年より林業部）において登用され、実際の森林政策の総括にあっていた。例えば、林墾部の初代部長に就任したのは日本やドイツで専門教育を受け、中華民国期の林政方面でも活躍した経験のある梁希であった。周恩来などは、彼の見解に対して信頼を置き、森林過少という現状への危機意識を高めていったことが伺える⁴⁾。また、1960年代前半の調整政策期、國務院の副総理・農林弁公室主任として、事実上、農林業部門の実務的指導者であった譚震林は、全域的な森林の維持・拡大の推進にあたって、林業部・中国林業科学院等における森林官僚・技術者のみならず、歴史学方面の知識人をも招聘した研究グループを組織し、域内外を問わず、歴史的な経験を政策に反映させようとする試みを行っている（譚震林伝編纂委員会、1992: 338-344）。

III 森林の機能別に見た指導者層の認識

次に問題とすべきは、これらの「森林・樹木を増やせ」という指導者層の共通の認識が、どのような森林の「機能」や、それに付随する「便益・価値」に基づいていたのか、という点である。これらの機能・便益・価値の違いに応じて、政策行為者を含めた個々の人間は、森林に対して、異なる立場を形成し、異なる働きかけを行うと考えられる。その結果、

政策実施を通じて造成・保護される森林の形態も異なることになり、ひいては地域の森林環境変化が方向づけられることになろう。そこで、以下においては、個別の森林の機能に注目することによって、現代中国の指導者層の森林認識をより掘り下げてみたい。

1. 物質提供機能

(1) 商品提供機能（木材を中心とした商品的林産物の生産供給）

木材を中心とした商品的林産物の生産供給は、功利的な価値、財の蓄積といった便益を背景に、近現代の人間社会においては、最もポピュラーな森林の機能として認知されてきた。現代中国においては、1950～70年代には計画統制、1980年代以降は市場経済という生産流通過程を通じて、その機能の発揮が図られている。

一元的な国家運営を担う指導者層は、この森林の商品提供機能を、生産供給過程の独占による私財の蓄積という直接的な便益に加えて、域内の経済建設・住民生活に必要な林産物の安定供給という政治的責任の達成という目線で捉えることになる。建国当初から森林の過少状況に直面してきた現代中国の指導者層は、主に後者の便益認識を前面に押し出してきた。1950年代、党中央農村工作部長として農林業方面の実務的中心であった鄧子恢は、1954年7月の国務院会議において、今後の経済建設に必要な木材を確保しなければならないという観点から、積極的な森林造成や木材生産過程の効率化を求めている⁵⁾。

1960年代前半の調整政策期は、大躍進期の森林破壊を受けて、劉少奇、周恩来、譚震林をはじめとした多くの指導者たちが、効率的な森林造成・保護の方法を模索・実践しようとした時期でもある。中でも、当時、国家副主席の董必武に至っては、この時期、ほとんど森林問題にのみ奔走していたといっても過言ではない。董は、地元の湖北省を中心に森林の現状に対する視察を重ね、木材が毎年400万から500万 m^3 不足しているという現状に基づいて、各地に駐留する人民解放軍部隊、および全国の学生を植樹造林に動員するという方法を提案している⁶⁾。ここで董に見られるのは深刻な木材供給不足への危機意識であり、それが「森林・樹木を増やせ」という認識に直結しているという構図である。また、大躍進期の混乱からの回復、中ソ対立に伴う国際的孤立といった厳しい条件下で、何とかして森林の物質提供機能の低下を補おうとする試行錯誤も見て取れる。

この調整政策期に限らず、現代中国を通じて、指導者層は「当面の国家運営のために、すでに稀少な森林資源を切り崩さざるを得ない」という、この森林の機能にまつわるジレンマに悩まれてきた。もちろん、その根本的な解決は、積極的な森林造成による森林の増加によってもたらされるとされ、1980年代より対外開放に転じてからは、域外からの林産物輸入も重要手段のひとつとなってきた。但し、急速な国防・工業建設が必要な状況では、「ある程度の過剰伐採もやむなし」との見解が、過去50数年間を通じて指導者層の間に一貫して存在した。例えば、調整政策期に譚震林は、工業建設における木材需要を満たすために、当面の森林破壊が不可避であるとの認識を示している⁷⁾。こうした見解を反映して、東北・西南地方等に広がる大面積の天然林の開発が、時期を通じて進められてもきたので

ある。

また、国家建設に必要な林産物の確保という便益を反映して進められたのは、基本的に、成長の速い樹種による単一林造成であった。長江中上流域以南の各地では杉木・ユーカリ等、北方黄河流域ではポプラ等による単一造林が展開された。また、雲南省等では天然林を伐採した跡地にゴム林のプランテーションが進められた。

(2) 生活資材提供機能（住民生活における薪炭・建築用材供給）

もうひとつ、森林・樹木には、物質生産という方面において、住民生活における日々の薪炭燃料・建築用材を提供するという機能が存在する。この機能は、日本ではエネルギー革命等を経てその役割が低下してきたが、現代中国では、依然として地域住民に価値・便益を付与されてきた。この機能に基づく林産物は、個々の住民が自ら採取・利用するケースが多く、商品財として市場に出ることが少ないという特徴がある。

同じ物質生産方面であるにもかかわらず、こちらの機能に対する指導者層の認識は対照的である。すなわち、過去50数年間、この機能に対する基層社会の住民の便益・価値は、共産党指導者層、及び中央政府の森林政策において、一貫して規制・転換の対象と認識されてきた。1950年代から、すでに将来の林産物供給の保障や、自然災害の防止等を理由として、住民の生活用の木材利用を転換させるという方針が打ち出されている⁸⁾。すなわち、森林の過少状況という局面においては、商品提供機能や、後に述べる保全的機能の発揮を保障する上で、この住民の生活維持に直結する機能に伴う基層社会の林産物需要を「削っていく」ことが不可避と見なされてきたのである。すなわち、現代史を通じて中国各地で進められてきた、商品提供機能の発揮を目的とした単一林の造成は、生活資材提供機能に基づく里山的な萌芽林に代替してきたという一面を併せ持つ。

2. 環境保全的機能

(1) 保全的機能（水源涵養、土壌侵食防止、防風固沙等）

大々的な森林造成・保護の推進において、現代中国の指導者層が、物質提供機能と同等、あるいはそれ以上に価値・便益を置いてきたのが、水源涵養、土壌侵食防止、防風固沙といった、森林の水土保全における機能である。これらの機能は、近年の世界的な環境意識の向上とともに、森林の公益的・環境保全的機能として一般的に認識されるようになった。

現代中国の指導者たちは、時期を通じてこれらの機能を、「自然災害の防止」によって社会の安定化を達成するものとして重視してきた。毛沢東、朱徳、劉少奇、周恩来といった初期の指導者たちは、各地を転戦・視察する中で、洪水の頻発、土壌の流出、沙漠化の進展と風害・沙害の被害拡大、旱干害の深刻化といった事態に直面する。彼らは一様に、その一因が当地の森林減少にあると認識していた。例えば、朱徳は、1947年に河北省を視察した際、「樹林を乱伐してはならず、造林して、風沙の襲来を防止しなければならない⁹⁾」と述べている。

この指導者層の認識は、近代の開発による土地荒廃への対策として、20世紀前半の欧米・日本等でも見られた国土保全的な森林管理の発想に近いものがある。すでに述べた通り、これらの域外で知識・技術を学んだ専門家が、森林政策方面で登用されていたことからしても、このような認識の存在は驚くに当たらない。しかし、現代中国の初期の指導者層に、この森林減少による自然災害の増加というメカニズムを、より臨場感をもって意識させることになったのは、過去の歴史を通じて形成された森林の過少状況の存在であった。1952年、中央の政務院は、深刻化する自然災害の防止を呼び掛ける中で、「…過去に山林が受けた長期的な破壊と無計画な急斜面の開墾は、多くの山区において雨水を涵養・蓄積する能力を失わせた。これらの現象は、河川における堆積を増加させ洪水の主因となっているばかりか、深刻な土壌流失・侵食増加によって、山稜高原地帯の土壌を日増しに劣化させ、耕地を日増しに減少させ、生産を日増しに減退させている」¹⁰⁾と指摘している。地域の現状に鑑みて、森林の水源涵養・土壌侵食防止機能が正確に認識されており、その低下が地域の農業生産の発展、すなわち住民生活の向上の深刻な阻害要因になっていると捉えられている。

森林造成・保護を自然災害の防止、国土保全に結びつける指導者層の認識は、近年の中央の森林政策においてもしばしば反映されている。例えば、1998年夏の長江・松花江流域大洪水の際、江沢民を中心とした指導層は、この大水害の重要な原因は河川上流域の森林減少にあると断定し、すぐさま國務院から森林破壊を伴う開墾と林地の徵用・占用を停止する措置を発するとともに、天然林資源保護工程（大河中上流域の天然林の伐採停止、及び東北・内蒙古の国有森林地帯の伐採制限）と退耕還林工程（主に急傾斜地に切り開かれた耕地や荒地に植樹して林に戻す）という、森林の水源涵養・土壌侵食防止機能の発揮を主目的とする2大プロジェクトを本格始動させた。これらに際して、当時、総理であった朱鎔基は、「天然林伐採の未完全な停止、緑色植被の継続減少、水土の流失の拡大は、中華民族の生存と発展が危ぶまれる問題である」¹¹⁾と述べ、強い調子で森林の保全的機能の低下に対する危機意識を表明している。

この保全的機能に対する重要性認識は、前述した指導者層の「正当性の確保」という文脈で捉えると分かりやすい。すなわち、それぞれの政治路線による一元的な国家運営を進める以上、自然災害の増加による生産発展の抑制、社会不安の醸成は、自らの政治基盤を掘り崩すことになりかねない。このため、少なくとも森林造成・保護の推進を通じて保全的機能の維持・向上をアピールする姿勢が、現代中国の指導者たちに求められてきたのである。

この点に関して、彼らにとって好都合だったのは、皮肉にも、自らが政権を担った時点で、すでに地域の森林減少・劣化が相当に進んでいたという事であった。1958年末の大躍進期、少数民族出身の指導者として副総理の地位にあったウランフ（ウラン夫）は、内蒙古等において沙漠化の被害が深刻化してきた理由を、旧社会体制の沙漠への屈服とした上で、建国以降の当地での植樹造林を、「共産党の指導に基づく沙漠化への闘争の成果」と

して評価している¹²⁾。同様に1997年、江沢民は、西北地方の沙漠化を歴史的な戦乱による破壊の結果とし、共産党の指導下で大々的な森林造成を行うことによって、根本的な改変が可能であるとしている¹³⁾。

すなわち、各時期の指導者たちは、歴史的に作り出された森林の過少状況という現状において、森林造成・保護による保全的機能の向上に取り組むことで、対立する同時代の政治路線ばかりでなく、王朝期までを含めた過去の政権との「違い」を見せつけ、自らの国家運営の正しさを示すという論理を構築し得たのである。

こうした森林の保全的機能に対する指導者層の認識は、実際の森林政策において、基層社会の森林利用の「規制・管理」という形で反映されることが多かった。例えば、水源涵養・土壌侵食防止・防風固沙等の機能を発揮させるために、各地の荒漠化した山々や植林地において人為的な活動を排除し、森林造成・更新を促すという「封山育林」が1950年代から実施されてきた。また、近年の天然林資源保護工程や退耕還林工程も、その対象地で行われてきた木材生産・農業・牧畜生産活動を規制し転換させるという特徴を有している。その結果、幾つかの地方では天然更新による複層林・混交林の育成も見られたが、すでに気候が乾燥化して土壌侵食の深刻な北方黄河流域等では、乾燥に強いマツや、成長の速いポプラ等による単一林の人工更新を行わざるを得ない場合も多かった。

(2) その他の環境保全的機能（生物多様性維持、二酸化炭素吸収等）

以上、保全的機能に含めた森林の諸機能は、1970年代に入ると、世界的な環境問題への関心の高まりを受けて、中国においても「森林・生態環境の保全」という文脈の中で、その重要性が認識されるようになる。

この環境問題という概念の広まりと受容に伴って、新たに指導者層を含めた政策担当者に認知されていったのが、森林の生物多様性維持、二酸化炭素吸収といった機能である。改革開放期の1980年代に入ると、薄一波や李先念といった当時の共産党の長老たちが、「生態バランスの失調・破壊」という概念で過去の森林減少・劣化を捉えるようになる¹⁴⁾。また、1980年代から1990年代にかけて、絶滅危惧種の保護に関するワシントン条約や、リオ・デジャネイロ国連環境開発会議を契機とした生物多様性維持への国際的取り組みに対して、改革開放期の指導者層は積極的な参加の姿勢を示すとともに、森林の育む貴重な生態系や動植物を保護するため、野生動植物保護、自然保護区建設といった方面での施策を具体化させてきた。しかし、引き続き森林の過少状況にあって、指導者層と中央政府によるこれら新たな諸機能発揮のための具体的な施策は、現有の森林保護、及び荒漠地への森林造成という、それ以前と本質的に変わらないものに落ち着くことになっている。

3. 精神充足機能（景観・風土形成、保健休養・レクリエーション、精神文化の涵養等）

物質提供機能、環境保全的機能に加えて、森林には、美しい景観・風土を形成し、保健休養・レクリエーションの場を提供し、さらには信仰や愛情・自己同一化の対象となる等、人間の精神的充足という価値・便益を満たす機能が存在する。

このうち、例えばエコ・ツーリズムのような形式で、中国の一般住民が、景観・風土形成、保健休養・レクリエーション等の機能を裏付ける価値・便益を享受し始めたのは、経済発展に伴い収入や余暇が増加したここ10数年程度のことである。これに対応する形で、指導者層を含めた中央政府も、世界自然遺産指定への働きかけ、自然保護区や森林公園の画定、及び、それらの区域内での観光施設・交通整備等の政策を打ち出してきた。一方、一部の少数民族居住地区では、住民が自然崇拜の形で身の回りの森林を厳格に保護し、精神的な拠り所とする文化が伝統的に存在した。こちらの機能・価値・便益に対して、中央の指導者層は、社会主義建設に伴う旧習の打破という文脈で否定する傾向にあった。

これらは、地域住民の有する価値・便益への政策的対応である。その一方で、現代中国の指導者層は、この森林の機能を、政策行為者としての立場からの独特な価値・便益を付与することによって、能動的にクローズアップさせてきた。

まず、森林の景観・風土形成機能に関する部分として、現代中国の指導者層の間には、荒漠化した山々や緑の見られない都市・道路といった「森林・樹木の無い景観」は「醜く、貧しく、悪い」ものであり、反対に、現有の森林地帯や緑化された農村・都市等の「森林・樹木の生い茂る景観」は、「美しく、豊かであり、善い」ものであるという共通認識が明らかに存在した。毛沢東の呼びかけに基づいて、至る所を緑で埋め尽くせという「大地の園林化」の概念等は、まさにこの認識を体現したものである。また、改革開放期において鄧小平の片腕であった万里は、首都北京の緑化の必要を強調した際、「全市人民の努力を通じて、速やかに我々の首都を、緑の樹木が萌えるように生い茂り、百花が華やかに咲き乱れ、緑の草で地が覆われるという、優美かつ清潔な、一流の現代文明都市としての形態を備えたものにする」¹⁵⁾と述べ、樹木の存在する景観を「文明化」の進展を示す重要な指標と位置付けている。現在、北京オリンピック開催に向けて急速に進められている都市緑化も、この指導者層の森林・樹木の景観形成機能に対する認識と結びつけて理解することができる。

この指導者層における共通認識の存在は、彼らが大衆動員による森林造成・保護に対して期待していた、もうひとつの便益を形成した。指導者層が「緑化＝美しい景観・風土の形成」と認識しているならば、全域的な森林造成・保護の推進は、「美しい国家・郷土づくり」を意味するものとなる。そこから生まれたのは、この目的の下に地域住民を動員すれば、彼らの愛国心・愛郷心が強化され、国家統合が促進されるという期待・発想であった。

「緑化祖国」という概念は、まさにこの発想に基づいている。毛沢東によるこの概念提起を報道した『人民日報』は、以下のように記している。

「青年を組織して植樹造林に参加させることには、別の方面の意義が存在する。植樹造林は、青年に対する最も活き活きとした、社会主義前途の提示と共産主義労働態度の教育となる。青年は、植樹造林に参加すると、極めて自然に故郷の建設と、将来の

幸福な生活の確立を関連づけて考えるようになる。多くの成年は、すでに緑化された美しい景観に鼓舞され、「沙漠を緑で覆ってしまおう」「黄河の水を清くしよう」といった英邁なスローガンを叫んでいる。青年たちのこの種の情熱は、とても貴重なものである」（「社論：青年們 努力緑化祖国」『人民日報』、1956年3月2日）。

ここでは明らかに、住民を動員した森林の生い茂る美しい景観・風土の形成が、社会主義建設の下での愛郷心・愛国心の醸成に結びつくという見解が示されている。

この森林造成・保護と国家統合の促進という意図の結びつきは、指導者層による愛情・自己同一化の対象としての森林・樹木への注目も反映していた。改革開放期、鄧小平によって提唱された全民義務植樹運動を指揮する際、万里は、この運動を「国家・社会のために服務する公益活動を通じて、全人民の高度な愛国の情熱を発揚」させ、「祖国の一花・一草・一木を熱愛する習慣を養成し、集団主義・共産主義の道徳気風を養い、人民の思想的限界と情操を押し上げ、社会主義祖国建設の偉大な目標に向かって前進」¹⁶⁾ させるものだという認識を示している。すなわち、ここでは住民が森林・樹木に対して愛情を注げば、それが愛国主義に結びつくという論理が形成されている。言い換えれば、「森林・樹木への尊敬や愛着」に伴う精神の安寧という人々の価値・便益が、指導者層の認識においては、「国家への帰属意識」に伴う精神の安寧と、相互補完的であると見なされているのである¹⁷⁾。

すなわち、現代中国の指導者層は、景観・風土形成、愛情・自己同一化の対象といった森林の精神充足機能に対して、森林の過少状況下での森林造成・保護を推進するにあたって、住民の愛国心・愛郷心を喚起し、国家統合を促進するという便益を有するものと認識していた。これはもちろん、彼らの進める国家運営を円滑化するという意味において、指導者層による自らの存立基盤の強化や正当性の維持に繋がるものであった。

IV 指導者層の森林認識の特徴とその社会的背景

以上のように、現代中国の指導者層は、森林の提供する多様な機能に対して、極めて特徴的な価値・便益を付与してきた。本節では、改めて先行研究の枠組みを検証しながら、これらの森林認識の特徴を整理し、それが形成された社会的背景についても考察を加える。

1. 社会主義体制下における「自然破壊的」な認識であったか？

まずは、シャピーロの議論を、もう一度振り返ってみよう。シャピーロは、「自然に対する戦勝」や「愚公山を移す」といったスローガンに象徴される毛沢東のイデオロギーを、「自然の軽視」と捉え、自然破壊の側面をクローズアップするものだとする。

しかし、森林方面に注目すると、毛沢東を含めた中国共産党の指導者たちは、過去50

数年間、一貫して森林の商品提供機能、保全的機能、景観・風土形成機能等の発揮を念頭に置いた、大規模な森林造成・保護の必要性を認識し、提唱してきた。確かに、毛沢東をはじめとした指導者たちは、「社会主義革命の完成と共に、人間は自力更生によって自然災害を克服できる」という意味において、「人間中心主義的」な認識を有していた。しかし、それは「自然破壊」を全面的に意味するものではない。彼らは、一元的に中国という地域の舵取りを担う立場として、社会の安定化や住民の福利厚生の上を、自らの国家運営に正当性を与えるためにも、当然のごとく意識せざるを得なかった。その文脈において、すでに劣化した森林という自然環境は、まさに「人間の自力更生」によって「改善」され、その商品提供機能や保全的機能を維持・向上させるべきものと捉えられていた。建国初期より現在までの森林造成・保護政策の継続は、まさにこの認識の体现であった。この中で、「自然に対する戦勝」や「愚公山を移す」といった、シャピーロが問題とした概念は、大躍進期を含めて一貫して「劣悪な自然環境を人為的な植樹造林で克服する」という意味で用いられている（張子存「向大自然全面開戦」『人民日報』、1958年6月18日）。

すなわち、この「森林・樹木を増やせ」という指導者層の共通認識を踏まえると、大躍進期における鉄鋼増産に伴う森林伐採等の自然破壊が、特定の指導者のイデオロギー的欠陥に基づいていたというシャピーロの議論は奇異に映る。実のところ、シャピーロの分析は、ダム建設や鉄鋼生産関連の資料にのみ基づいており、森林方面の資料をほとんど参照していない。このため、「歴史的な破壊によって形成された森林過少という状況に対して、毛沢東をはじめとした指導者がどのように向き合ったか」という視点が抜け落ちてしまっており、毛沢東時代の「自然改造」を、自然の軽視による「改悪」という意味でしか捉えられなかったのである。本稿で見えてきた通り、現代中国の開始の時点から、指導者層は、森林の諸機能の低下を問題として受け止め、その改善をアピールせざるを得なかった。なぜなら、それに歯止めをかけなければ、自らの政治的立場が危うくなってしまいうからである。この限りにおいて、特定個人の立場・イデオロギーの違いが入り込む余地は無かったと言えよう。したがって、大躍進期における集中的な森林破壊や、現代史を通じて進められた東北・西南地方に広がる天然林の切り崩しに対しては、違う角度からの説明が必要となる。

2. 森林の「シンプリフィケーション」か？

次に、スコットの「シンプリフィケーション」という枠組みが、現代中国において当てはまるかどうかについて、指導者層の森林認識と照らし合わせて検証してみよう。

前節での森林の諸機能別の分析からすると、現代中国の指導者層において、特定の価値・便益に基づき森林管理を画一化する傾向は、少なからず存在したように思われる。例えば、同じ物質提供機能においても、国家建設のための用材提供が一貫して重視されていたのに対して、基層社会に暮らす住民にとって、最も身近で直接的な生活資材の確保は、規制・管理の対象と見なされていた。この指導者層の認識に基づいて、実際に、農村の多

くの土地で、鋳工業・都市建設用の木材生産を主眼に据えた、成長の速い単一樹種による森林造成が進められてきた。これらは、例えば、地域住民における薪炭提供、景観の維持や信仰の対象としての森林の機能が、商品提供機能の前に画一化されてきた結果と言えるだろう。

しかし、実際の森林環境への影響という点からすると、現代中国の事例は、これまでの政府によるシンプリフィケーションとして想定されてきたイメージとは、異なる状況を演出している。すなわち、ネルソンらの研究で明らかにされてきたのは、基層社会における「既存の」多様な森林環境や森林利用形態を、特定の機能・価値・便益に基づいて「作り変える」という過程である。これに対して、現代中国において、大部分の土地で行われてきたのは、すでに歴史的な森林減少による荒漠化を受けて、森林の諸機能を「創り出す」試みであった。この過程において、各時期の指導者層は、森林の商品提供機能のみならず、水源涵養、土壌侵食防止等の保全的機能への価値・便益を明らかに付与しており、少なくとも機能・便益レベルでの画一化とは捉えられない状況にあった。

3. 現代中国の「統治者」としての森林を見る「眼」

以上のように、現代中国の指導者層の森林認識は、特定個人のイデオロギーによってまとめられるものではなく、特定の森林をめぐる機能・便益に基づくシンプリフィケーションとして説明できるものでもない。

ひとつだけはっきりしているのは、彼らの認識が、直接、森林と向き合っ暮らす基層社会の人々の価値・便益とは、異なる性質を持ってきたということである。これは、現代中国の「統治者」としての森林を見る「眼」と言い換えてもよい。

この点に関して、第1に注目すべきは、自らの「正当性の確保」という観点から、指導者層によって森林の諸機能が価値づけられているという点である。一元的な国家運営を担う立場からすれば、彼ら自身が、将来の経済建設に必要な資源を確保する方策を講じねばならない。森林の商品提供機能は、この観点から価値づけられてきた。

森林の環境保全的機能に対しても、各時期の指導者層は、この正当性の確保という文脈において価値・便益を付与していた。そもそも、中国においては、自然災害の増加に対して神経質にならざるを得ない政治文化が歴史的に存在してきた。例えば、古くからの天人合一・天命思想とは、中国の統治政権が、自然界を含む「天」によってその正統性が認定されているとするものであり、故に、天変地異・自然災害の頻発やそれに伴う社会不安を、人間界における統治政権の失政に結びつけて考えるものであった¹⁸⁾。また、農業生産を基幹としてきたこの地域の統治者が、域内を横断する大河の治水事業に対して、住民生活の安寧や農業生産力の向上といった観点から、常に注意を払わねばならない位置づけにあったことは明らかである。かかる見地からすれば、現代史において自然災害の防止を目的とした森林造成・保護政策の推進が、前時期との対比を通じて、各時期の政治路線や共産党主導の政権自体の正当性の証明と見なされてきたことは、得心のいくものとなる。

さらに、現代中国の森林造成・保護政策では、森林の精神充足機能までが、地域住民の愛国心・愛郷心を喚起し、地域の統合を促進し、自らを中心とした政治体制を強固にするものとして、指導者層に価値づけられてきた。その価値づけの根本には、「森林・樹木の生い茂る景観」が「美しく、豊かであり、善である」という指導者層の共通認識があった。この形成理由としては、上記の文化的背景や、実際の政策形成を支えた森林方面の知識人・専門家の影響といった点が挙げられるだろう。同時に、一考すべきなのは、現代中国の指導者層の経歴である。毛沢東、朱徳、劉少奇、周恩来をはじめとして、建国から改革開放に至るまでの指導者たちの多くは、温暖湿潤で森林が生育しやすい長江流域以南の丘陵地帯に生まれ、この地方を初期の活動拠点としてきた。この過程において、彼らの中に、森林の諸機能に対する理解や、森林の生い茂る風景に対する親和性が醸成されたとしても不思議はない。加えて、彼らはその後、長征を経て北方黄河流域の荒漠化地帯に活動拠点を移している。この経験は、彼らにとって、生まれた地方との比較を通じて、改めて森林の保全的機能や精神充足機能の重要性を認識し、全土にわたって森林の生い茂る風景を創造しようとする契機になったのではないか。

次に注目すべきは、この「正当性の確保」という指導者層の価値・便益に支えられた「緑化祖国」という名分を、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想、鄧小平理論、あるいは中国の伝統的な統治理念といった、現代中国のあらゆる政治思想的バックボーンが支える構図となっている点である。各時期の指導者たちは、たびたびマルクスやエンゲルスの著作の中から、資本主義の森林破壊性や、彼らの森林の重要性認識を示すと考えられる部分を引用し、「社会主義の優越性を生かして歴史的な森林破壊を克服しなければならない」としている¹⁹⁾。また、調整政策期等においては、中国古来の『詩経』、『齊民要術』、『農政全書』等における森林の保全的機能を重視した記述が取り上げられ、「祖国の古書における科学遺産」として、森林造成・保護の模範とすべきことが喧伝されてきた（楽天宇「森林在發展農業中的重大作用」『人民日報』、1963年4月30日）。さらに、文化大革命以降の各時期の政治路線は、自らが依拠する思想・理念こそが、効果的な森林造成・保護の達成を保障するという文脈で、それ以前の政策や理念を批判し、その正当性を誇示してきた。これらの各思想との結びつきは、指導者層の森林造成・保護への重要性認識を改めて示すと同時に、特定個人の思想・イデオロギーに基づいて、現代中国の統治者の森林を見る「眼」が左右されてきた訳ではない、という点をことさらに浮き彫りにするものである。

おわりに

現代中国の指導者層が森林に対して抱いてきた認識とは、その一元的な政治体制の下で、森林の過少状況という自然生態的背景と向き合う中で、「如何に森林の諸機能を維持・向上・調整させていくか」という「統治者」の視点に基本的に立脚するものであった。こ

の視点に基づく「森林・樹木を増やせ」という認識は、特定のイデオロギー・思想に左右されることなく、逆にそれらを内部化する形で、実際の現代中国の森林造成・保護政策に反映されてきた。この指導者層の森林認識は、社会主義体制の自然破壊性という単純な文脈で説明できるものではなく、旧ソ連・東欧等における商品提供機能に特化したシンプリフィケーションとも一線を画するものであった。むしろ、地域の自然生態的・社会的背景を反映した、政策行為者のプラグマティズムとして説明できる部分が大きいと思われる。

では、こうした指導者層の森林認識の下で、なぜ、大躍進期の森林破壊をはじめ、各時期の人間—森林関係の変化が生じたのだろうか。この過程の分析に至ってはじめて、少数の指導者の指令の下、上意下達 of 政策実施システムによる自然への働きかけを行ってきた、現代中国特有の問題構造が浮き彫りになってくるように思われる。本研究の次なる課題は、この点を解明することにある。

(謝辞) 本研究は、日本学術振興会特別研究員奨励費(19-6149)の助成を受けたものである。

(注)

- 1) 周恩来、「林業工作為百年工作」、1950年4月14日(中共中央文献研究室・国家林業局編、1999: 3-4)。
- 2) 毛沢東、「征詢對農業17条的意見」、1955年12月21日(毛沢東、1977: 260-261)。
- 3) 江沢民、「在姜春雲副總理〈関与陝北地区治理水土流失建設生態農業的調查報告〉上的重要批示」1997年8月5日(中華人民共和國林業部、1998: 特輯1)。
- 4) 周恩来、「林業工作為百年工作」、1950年4月14日(中共中央文献研究室・国家林業局編、1999: 3-4)。
- 5) 鄧子恢、「関於農業・林業・水利的五年計画」、1954年7月13日(鄧子恢、1996: 372-385)。
- 6) 董必武、「植樹造林工作应当注意解決的幾個問題」、1964年6月11日(林業部〈董必武林業文選〉編輯、1985: 53-59)。
- 7) 譚震林、「在南方各省・区・市林業工作會議上的總結報告」、1962年7月4日(中華人民共和國林業部弁公庁、1963: 4-11)。
- 8) 政務院、「関於節約木材的指示」、1951年8月13日(中共中央文献研究室・国家林業局編、1999: 20-22)。
- 9) 朱徳、「對冀中經濟工作的意見」、1947年11月(朱徳、1983: 213-219)。
- 10) 政務院、「関於發動群眾繼續開展防旱抗旱運動併大力推行水土保持工作的指示」、1952年12月26日(中共中央文献研究室・国家林業局編、1999: 41-45)。
- 11) 朱鎔基、「在陝西・雲南・四川・甘肅・青海・寧夏等地考察時間与造林綠化和生態環境建設的重要講話摘録」(国家林業局、2000: 特輯2-6)。
- 12) 烏蘭夫、「改造沙漠造福人民」、1958年11月2日(烏蘭夫、1999: 498-500)。
- 13) 江沢民、「在姜春雲副總理〈関与陝北地区治理水土流失建設生態農業的調查報告〉上的重要批示」、1997年8月5日(中華人民共和國林業部、1998: 特輯1)。
- 14) 薄一波、「第2次全國環境保護會議上的講話」、1984年1月7日(薄一波、1992: 422-426); 李先念、「不能放松農田基本建設」、1979年7月11日(中共中央文献編輯委員會編、1989: 379-388)。
- 15) 万里、「全民義務植樹、綠化祖國、造福子孫後代」、1982年3月11日(万里、1995: 204-208)。
- 16) 同上。
- 17) 日本等においても、皇室の誕生・即位の際には植樹が行われるなど、近代以降、森林・樹木と国家のイメージ形成は、密接な関係にあったように思われる。この意味も含めて、なぜ、このような同一視がなされるのかに対しては、詳しい検討が必要である。
- 18) 溝口雄三は、朱子学の理気論から中国の自然観をこのように考察し、自然災害の頻発が統治政權の資質を判断する1つの目安となることを示唆している(溝口他編、1995: 43-44)。
- 19) 特に、エンゲルスが「猿が人間化するにあたっての労働の役割」において述べた、人間は労働を通じて自然を改変する能力を得ることによって、他の生物から区別されるべき存在となるが、自然を余りに改変しすぎると森林破壊による土地の荒廃等がおこり、近視眼的な資本主義生産様式では結果として自

然の復讐を招く、という一節（エンゲルス、1968: 491）は、各時期の指導者たちによってしばしば引用されている。

（参考文献）

日本語

上田信（1999）、『森と緑の中国史：エコロジカル・ヒストリーの試み』岩波書店。

F.エンゲルス著（1968）、『マルクス・エンゲルス全集』第20巻（大内兵衛・細川嘉六監訳）、大月書店。

日本国際問題研究所編（1975）、『中国大躍進政策の展開』上巻、日本国際問題研究所。

平野悠一郎（2004）、「中華人民共和国における森林関連の基本法の特徴」『林業経済研究』第50巻第1号、53-64 ページ。

——（2005）、「現代中国の森林をめぐる権利関係：社会主義体制下での変容と現状」『環境社会学研究』第11号、219-228 ページ。

溝口雄三他編（1995）、『中国という視座』平凡社。

中国語

薄一波（1992）、『薄一波文選：1937-1992年』北京：人民出版社。

当代中国叢書編集委員会（1985）、『当代中国的林業』上海：中国社会科学出版社。

鄧子恢（1996）、『鄧子恢文集』北京：人民出版社。

国家林業局（2000-2006）、『中国林業年鑑』1999・2000-2006年版、北京：中国林業出版社。

林業部〈董必武林業文選〉編輯組（1985）、『董必武林業文選』北京：中国林業出版社。

毛沢東（1977）、『毛沢東選集』第5巻、北京：人民出版社。

馬驥編著（1952）、『中国富源小叢書：中国的森林』上海：商務印書館。

孫翊編（2000）、『新时期党和国家领导人論林業与生態建設』北京：中央文献出版社。

譚震林伝編纂委員会（1992）、『譚震林伝』杭州：浙江省人民出版社。

万里著・中共中央文献編集委員会編（1995）、『万里文選』北京：人民出版社。

烏蘭夫（1999）、『烏蘭夫文選』上冊、北京：中央文献出版社。

中共中央文献編輯委員会編（1989）、『李先念文選：1935-1988』北京：人民出版社。

中共中央文献研究室・国家林業局編（1999）、『周恩来論林業』北京：中央文献出版社。

中華人民共和国林業部弁公庁（1963）、『林業工作重要文献彙編』第2輯、北京：中華人民共和国林業部弁公庁。

中華人民共和国林業部編（1988-1998）、『中国林業年鑑』1987-97年版、北京：中国林業出版社。

朱德（1983）、『朱德選集』北京：人民出版社。

英語

Elvin, M. (2004), *The Retreat of the Elephants: An Environmental History of China*, New Haven and London: Yale University Press.

Nelson, A. (2006), *Cold War Ecology: Forests, Farms, and People in the East German Landscape, 1945-1989*, New Haven: Yale University Press.

Scott, J. (1998), *Seeing Like a State; How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*, New Haven: Yale University Press.

Shapiro, J. (2001), *Mao's War against Nature: Politics and Environment in Revolutionary China*, New York: Cambridge University Press.

（ひらの・ゆういちろう 森林総合研究所 E-mail: hiranoy@affrc.go.jp）